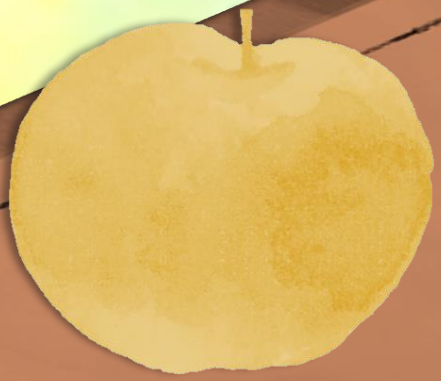
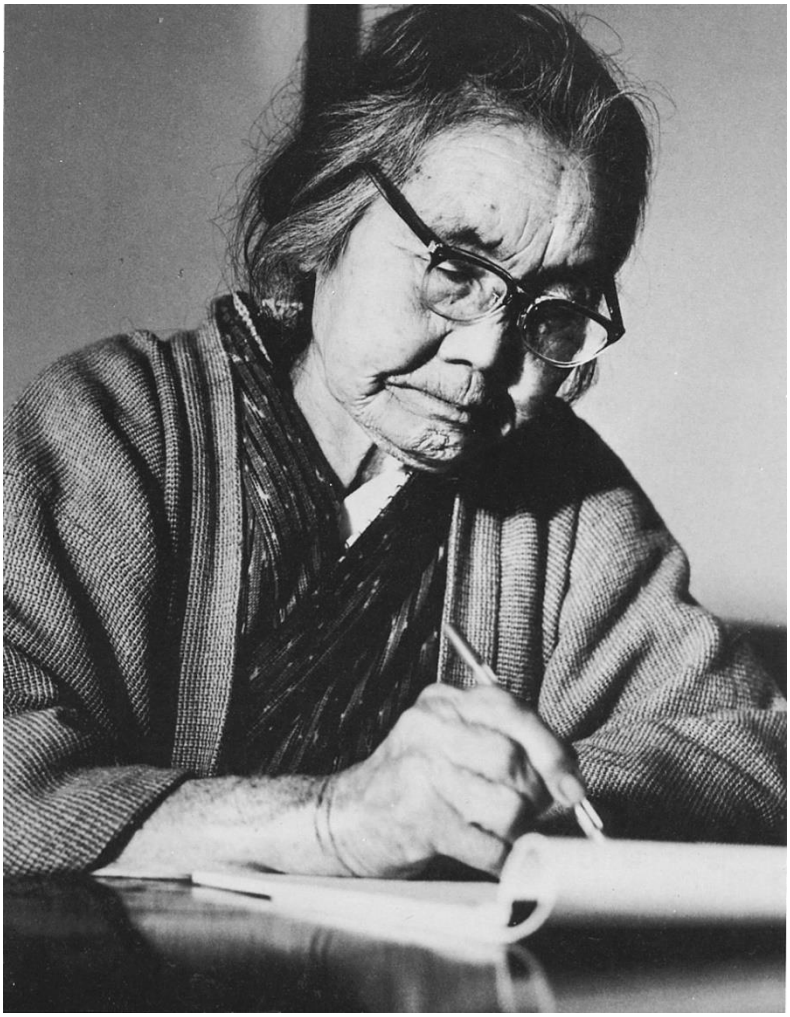
令和６年度　前期企画展

吉野 せい 入門

76歳の時『洟をたらした神』で大宅壮一ノンフィクション賞と田村俊子賞を受賞した吉野せい（いわき市小名浜出身）について、その生涯や作品などをご紹介します。



主催：いわき市立いわき総合図書館（いわき市平字田町120　☎0246-22-5552）
共催：いわき市立草野心平記念文学館



吉野せい（草野日出雄　撮影）

はじめに

今年は、いわきの作家吉野（よしの）せい生誕125周年および『洟（はな）をたらした神』出版50周年にあたります。76歳で大宅壮一ノンフィクション賞と田村俊子賞を受賞した「百姓バッパ」の文学は世間に衝撃を与え、その文学業績を記念して新人のすぐれた文学作品を顕彰する「吉野せい賞」は現在も続いています。

本企画展は、草野心平記念文学館と共催し、吉野せいの魅力を改めて広く紹介することを目的に開催します。

なお、開催にあたり、吉野家をはじめとするご遺族の皆様に写真等の使用について御協力をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

いわき市立いわき総合図書館

誕生～10 代

吉野せい（旧姓：若松）は、明治 32（1899）年 4 月 15 日、福島県石城郡小名浜町下町（現・いわき市小名浜下町）の網元の家に、父・若松力太郎、母・ミヱの次女として生まれました。兄弟は、姉と兄がひとりずついました。

窪田第二尋常小学校時代の若松（旧姓）せい（前列左端）　大正 5 年頃

大正 3（1914）年、町立小名浜尋常高等小学校高等科（現・いわき市立小名浜第一小学校）を卒業。小名浜郵便局の電話交換手になりますが、1 年ほどで辞め、小学校教員の検定試験に備えます。

大正 5（1916）年、独学で小学校教員の試験に合格したせいは、窪田第二尋常小学校（現・いわき市立勿来第二小学校）や母校で 2 年ほど教師として働きました。

この頃から文学に関心を持ち、当時キリスト教伝道師として平に赴任していた詩人・山村暮鳥らの雑誌「LE・PRISME」や「福島民友新聞」などに短歌や短編小説を寄せています。

山村 暮鳥

明治 17（1884）年～大正 13（1924）年

詩人。本名：土田八九十。現・群馬県高崎市出身。

明治 41（1908）年にキリスト教伝道師となり、各地に赴任しながら創作活動を行う。

大正元（1912）年から大正 7（1918）年までは現・いわき市平に滞在。当時の平近郊の文学青年たちに大きな影響を与えた。この頃、吉野せいや三野混沌とも知り合い、特に混沌との交流は生涯にわたって続いた。

主な詩集に『聖三稜玻璃』『梢の巣にて』などがある。

いわき市文化センター敷地内には、暮鳥の詩碑が建立されている。

20代

大正9（1920）年、「魂の打ちこめないこの仕事で飯をくうことの空しさ」を感じたせいは、教師を辞め、鹿島村（現・いわき市鹿島町）で人類学や考古学の研究をしていた八代義定（やしろよしさだ）の書斎「静観室」に通い始めます。せいは、ここで多くの文学書、思想書、哲学書を読みました。

この「静観室」に通っている人物の中に、詩人・三野混沌（みのこんとん）（本名：吉野義也（よしのよしや））がいました。混沌は、好間村（現・いわき市好間町）北好間の通称・菊竹山で開墾生活をしており、暮鳥や、いわきの詩人・猪狩満直（いがりみつなお）らとも交流がありました。

義定の紹介でふたりは知り合い、大正10（1921）年に結婚。この時、せいは22歳、混沌は27歳でした。せいはそれまでに書いた原稿、日記、手紙を全て焼いて開墾生活に入りました。

30代～40代

結婚後、せいは農作業と子育てに追われ、ほとんど作品を書くことはありませんでした。昭和4（1929）年には、満直の詩集『移住民』の跋文（ばつぶん）（あとがき）を草野心平に送っていますが、これはせいの辞退により掲載を見合わせています。

また、厳しい開墾生活の中では、悲しい出来事もありました。昭和5（1930）年12月、せいが31歳の時に、次女・梨花が急性肺炎のため生後9か月でこの世を去ります。
せいは翌年の1月から、梨花の死の前後を日記に書き留めています。

「梨花を思ふとき創作を思ふ。梨花を失ふたことに大きな罪悪を感じてゐる自分は、よりよき創作を以て梨花の成長としよう。創作は梨花だ。書くことが即ち梨花を抱いてゐることだ」「梨花、母さんをみてゐよ」（「梨花鎮魂（日記）」より）

そう書き綴ったせいは、2月に童話「石」を混沌らの雑誌「海岸線」第2号に発表。4月には、新聞連盟主催の懸賞小説に「新原炭礦地帯」（後に「土べら」と改題）を投稿。予選を通過していますが、それ以降は書くことはありませんでした。

梨花の死や開墾生活での様々な出来事は、40年後に『洟（はな）をたらした神』に収められた作品たちの元となっています。

三野（みの） 混沌（こんとん）

明治 27（1894）年～昭和 45（1970）年

詩人。本名：吉野義也（よしのよしや）。吉野せいの夫。現・いわき市平下平窪（しもひらくぼ）出身。

大正 2（1913）年、県立磐城中学校（現・磐城高等学校）卒業後、家業の農業を手伝いながら詩を書き始める。この頃、山村暮鳥と出会い、生涯にわたり交友を続ける。

大正 5（1916）年、好間村（現・いわき市好間町）北好間の通称・菊竹山に 1 町 8 反の土地を借り、開墾生活に入る。そのかたわら詩作を続け、猪狩満直や草野心平らと共に創作活動に励んだ。

主な詩集に『百姓』『或る品評会』『阿武隈の雲』などがある。

せいの作品『暮鳥と混沌』『洟をたらした神』『道』には、混沌との生活が描かれた作品も収められている。

猪狩（いがり） 満直（みつなお）

明治 31（1898）年～昭和 13（1938）年

詩人。現・いわき市好間町川中子（かわなご）出身。

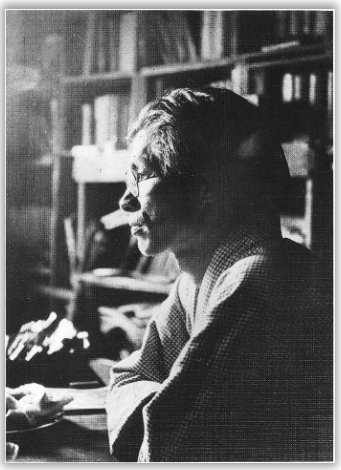
大正 6（1917）年ごろから聖書研究に没頭し、詩や絵の創作を始める。この頃、三野混沌を訪ね、それをきっかけに山村暮鳥のことも知る。

大正 12（1923）年、草野心平と知り合う。大正 13（1924）年には満直、混沌、心平らが集まり、平町（現・いわき市平）で詩の講演会を開いた。この時、心平が混沌の家に宿泊し、吉野せいを知るなど、満直はそれぞれの出会いのきっかけとなった。

主な詩集に『移住民』『農勢調査』『秋の通信』などがある。

せいは作品「かなしいやつ」で満直との思い出を綴っている。

満直の生家は、市指定有形文化財（建造物）「旧猪狩家住宅」として、いわき市暮らしの伝承郷で移築公開されている。

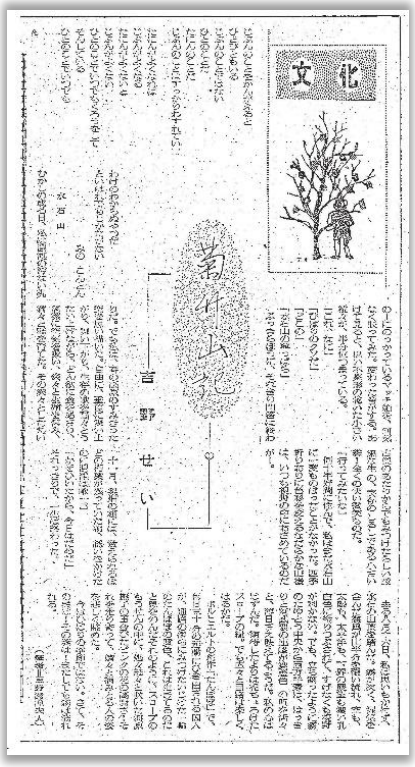


70代－1　「菊竹山記」『暮鳥と混沌』

昭和45（1970）年、せいは71歳になっていました。

同年4月、夫・混沌が76歳でこの世を去ります。

この頃から、せいは再びペンを執るようになります。心平らの同人詩誌「歴程」通巻143号 三野混沌追悼号には、「さいご」と題した一文と「故三野混沌略歴」を寄せました。また、この「歴程」を送ったことがきっかけで、「いわき民報」に同年11月16日から昭和47（1972）年11月6日まで「菊竹山記」を断続的に連載します。「菊竹山記」には、混沌や梨花について書かれたものや、せいの後の作品の原型といえるものもありました。



「菊竹山記①　水石山」
「いわき民報」昭和45年
11月16日　4面

昭和46（1971）年10月、心平の勧めもあり、せいは暮鳥と混沌の交流をまとめた『暮鳥（ぼちょう）と混沌（こんとん）』を同人詩誌「歴程」の発行所・歴程社から刊行します。限定300部のこの本は、せいにとって初めての単行本でした。

混沌の三回忌にあたる昭和47（1972）年4月、菊竹山に詩碑が建てられます。「天日燦（さん）として焼くが如（ごと）し出（い）でて働かざる可（べ）からず吉野義也（よしのよしや）」と記されたこの詩碑の除幕式で、せいは心平から「あんたは書かねばならない」と強く背中を押されます。

「自分のものを、わが一つの生涯を書くことだ。あんたにしか書けない、あんたの筆で、あんたのものをな」（「信といえるなら」より）

そう説き伏せられたこの出来事が、『洟をたらした神』執筆のきっかけのひとつとなります。

菊竹山麓（現・いわき市好間町北好間）

詩碑「天日燦として焼くが如し出でて働かざる可からず　吉野義也」

碑文は山村暮鳥の詩集『梢の巣にて』所収の 1,300 行からなる長詩「荘厳なる苦悩者の頌栄」の冒頭の一説。「吉野義也」は三野混沌の本名。草野心平が揮毫した。

草野 心平

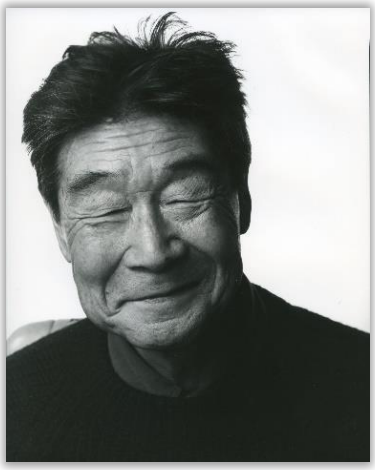
明治 36（1903）年～昭和 63（1988）年

詩人。現・いわき市小川町出身。

大正 10（1921）年、中国広東省広州の嶺南大学（現・中山大学）に留学し、中国で詩を書き始める。徴兵検査のために一時帰国した大正 12（1923）年、謄写版印刷で詩集『廃園の喇叭』を刊行。これを読んだ猪狩満直が心平を訪ね、満直を介して三野混沌と知り合う。大正 13（1924）年に満直、混沌らと開いた詩の講演会の夜、混沌宅に宿泊し、吉野せいとも知り合った。

また、混沌の没後は、せいの執筆に助言や励ましの言葉を送っている。

詩集に『第百階級』『定本蛙』などがある。



1977 年　小林正昭撮影

70代－2　『洟をたらした神』・文学賞の受賞

『暮鳥と混沌』刊行後、せいは、混沌と共に交友のあった詩人で哲学者、エッセイストの串田孫一（くしだまごいち）に原稿を送ります。原稿は孫一の編集する雑誌「アルプ」に昭和48（1973）年10月から昭和49（1974）年4月まで断続的に掲載されました。

その後、昭和49（1974）年11月、「アルプ」に掲載した4編を含む17編を収めた『洟をたらした神』が彌生書房（やよいしょぼう）から刊行されます。

この本に収めた作品たちについて、せいはあとがきで「その時々の自分ら及び近隣の思い出せる貧乏百姓たちの生活の真実のみ」であり、「底辺に生き抜いた人間のしんじつの味、にじみ出ようとしているその微かな酸味の香りが仄かでいい、漂うていてくれたらと思います」と記しています。

また、心平はこの作品たちを「小説であって所謂農民小説ではなく、記録であっても単なる記録でない」「怖ろしい文学」（『洟をたらした神』帯より）、孫一は「刃毀（こぼ）れなどどこにもない斧で、一度ですぱっと木を割ったような、狂いのない切れ味に圧倒された」（『洟をたらした神』序より）と評価しました。

そして、刊行の翌年、昭和50（1975）年4月、『洟をたらした神』は第6回大宅壮一（おおやそういち）ノンフィクション賞と第15回田村俊子（たむらとしこ）賞を受賞します。この時、せいは76歳。「百姓バッパ」の文学は、世間に衝撃を与えました。

吉野せい　大宅壮一ノンフィクション賞授賞式にて
昭和50年4月

きのう吉野せいさんに大宅賞
桜花らんまんの東京で
奇しくも混沌忌に授与式
技巧派を反省させた　と激賞

「いわき民報」
昭和50年4月10日　11面

大宅壮一（おおやそういち）ノンフィクション賞

戦前から戦後にかけて活躍したジャーナリスト・大宅壮一（明治 33（1900）年～昭和 45（1970）年）のマスコミ活動を記念して創設された賞。ルポルタージュ・内幕もの・旅行記・伝記・戦記・ドキュメンタリー等のノンフィクション作品を対象とし、受賞作は雑誌「文藝春秋」上で発表される。

田村俊子（たむらとしこ）賞

『木乃伊（ミイラ）の口紅』などの作品で知られる女性作家・田村俊子（明治 17（1884）年～昭和 20（1945）年）の没後、その印税を基金として創設された賞。

女性作家の作品を対象とする。第 17 回（昭和 51（1976）年）で終了。

70 代－3　受賞後

受賞後、時の人となったせいの元には、多くの取材や執筆依頼が舞い込みました。

地元・いわき市でもその快挙は話題となり、昭和 50（1975）年 10 月には文学による市への貢献により、教育文化功労者として市政功労者表彰を受けています。

また、同年 11 月には、植田公民館で「吉野せいさんを囲む会」が開催されました。

この時、せいは大宅壮一ノンフィクション賞の副賞の世界一周周遊券で旅行したヨーロッパのことや、自身の作品、農業生活のことなどについて語っています。

更に、昭和 51（1976）年 7 月には、『洟をたらした神』を原作とした舞台「天日燦として」（劇団手織座（ておりざ））が、東京公演に先立ち、いわき市平市民会館で上演されました。終演後、原作者であるせいには花束が贈られました。

「いわき民報」
昭和 50 年 10 月 1 日　2 面

「いわき民報」
昭和 51 年 7 月 26 日　11 面

「いわき民報」　昭和 50 年 11 月 29 日　11 面

70代－4　『道』

『洟をたらした神』の刊行後も、せいは作品を発表していきました。昭和51（1976）年には「未墾地に挑んだ女房たち」が『民衆史としての東北』に収録され、昭和52（1977）年には「アルプ」「歴程」「6号線」などに掲載された作品10編をまとめた『道』が彌生書房より刊行されました。

しかし、同時期にせいは体調を崩し、いわき市立総合磐城共立病院（現・いわき市医療センター）に入院。昭和52（1977）年11月4日、78歳の生涯に幕を閉じました。

没後　「吉野せい賞」の誕生

せいが死去した昭和52（1977）年の11月26日、舞台「洟をたらした神」（劇団手織座）が磐城市民会館（現・小名浜市民会館）で上演されました。追善公演となったこの公演は、立ち見が出るほどの記録的な動員数となりました。

また、主催者はこの時の益金をいわき市へ寄付。市はこれを受けて、昭和53（1978）年に「吉野せい賞」を創設しました。せいの文学業績を記念したこの賞は現在も続き、いわきの地で文学の芽を育てています。

吉野せい賞

吉野せいの文学業績を記念して、新人のすぐれた文学作品を顕彰し、市内の文化の振興に資するため創設された賞。

いわき市内に在住･通勤･通学している者、いわき市出身者または過去いわき市に在住・通勤・通学した者の作品を対象とする。

創作（小説・童話・戯曲）、文芸評論、ノンフィクションの各部門がある。

いわき市内の吉野せいゆかりの地

吉野せい年譜

年代	年齢	月日	出来事	取材作品
明治 32 (1899)	0 歳	4/15	福島県石城郡小名浜町下町(現・いわき市小名浜下町)の網元の家に、父・若松力太郎、母・ミヱの次女として生まれる。	
大正 3 (1914)	15 歳	3 月	町立小名浜尋常高等小学校高等科(現・いわき市立小名浜第一小学校)を卒業。小名浜郵便局の電話交換手となるが、1 年ほどで辞め、小学校准教員検定試験に備える。 この頃から文学への関心が高まり、創作意欲がおこる。	
大正 5 (1916)	17 歳		小学校教員検定試験合格。 福島県では紅一点として町の話題になる。	
		4 月	山村暮鳥らが創刊した「LE・PRISME」に短歌を投稿。	
		8 月	小名浜町(現・いわき市小名浜)に来ていた山村暮鳥と初めて会う。	
		9 月	窪田第二尋常小学校(現・いわき市立勿来第二小学校)の代用教員となる。	
大正 6 (1917)	18 歳	1 月	初めて書いた 110 枚の中編小説「破壊」を山村暮鳥に送る。「彼等」と改題され、山村暮鳥の推薦で「第三帝国」に若松せい子の名前で 4 回にわたって掲載された。	
		3 月	「殺人罪を犯すまで」(70 枚)を山村暮鳥に送る。	
		5 月	仕事に情熱を持てず教師を辞め、生家に帰る。	
		8 月	山村暮鳥や友人たちが「彼等の会」を開き、せいを励ます。	
大正 7 (1918)	19 歳		家事手伝いのかたわら、内外の文学書を耽読。	
大正 8 (1919)	20 歳	5 月	小名浜尋常高等小学校に勤める。	
大正 9 (1920)	21 歳	1 月	教師を辞める。 八代義定の書斎「静観室」に通い、多くの文学書、思想書、哲学書を読む。	
		9 月	八代義定から、好間村(現・いわき市好間町)北好間の通称・菊竹山で開墾生活を送っていた詩人・三野混沌(本名:吉野義也)を紹介される。	
大正 10 (1921)	22 歳	3 月	三野混沌と結婚。それまでに書いた作品、日記、手紙を全て焼いて菊竹山の開墾生活に入る。	
大正 11 (1922)	23 歳	7 月	長女・和　生まれる。	春「春」
大正 12 (1923)	24 歳			春「飛ばされた紙幣」
大正 14 (1925)	26 歳	2 月	長男・望　生まれる。	冬「かなしいやつ」
		3 月	北海道移民募集に応じることを決意した猪狩満直が、混沌・せい夫妻に別れを告げるために訪問する。	

年代	年齢	月日	出来事	取材作品
昭和 2 (1927)	28 歳	9 月	次男・洪　生まれる。	
昭和 4 (1929)	30 歳	3 月	猪狩満直の詩集『移住民』の跋文を草野心平に送る。 （後にせいの辞退で掲載を見合わせる）	
昭和 5 (1930)	31 歳	3 月	次女・梨花　生まれる。	夏「洟をたらした神」 冬「梨花」
		12 月	次女・梨花、急性肺炎で死亡。	
昭和 6 (1931)	32 歳	1 月	梨花の三七日忌を迎えた日に、梨花の死の前後を克明にノートに記録する。同じノートに 1 月 30 日から日記を綴る。	夏「ダムのかげ」
		2 月	童話「石」を三野混沌らの雑誌「海岸線」第 2 号に発表。	
		4 月	新聞連盟主催の懸賞小説に「新原炭礦地帯」を投稿、予選通過（予選通過後「土べら」と改題）。	
昭和 7 (1932)	33 歳	1 月	三男・峻　生まれる。	
			この年、「ヨーヨー」がフランスから輸入され、翌８年にかけて大ブームを巻き起こした。ヨーヨーの流行は「洟をたらした神」の背景となった。	
昭和 10 (1935)	36 歳	10 月	四男・誠之　生まれる。	秋「赭い畑」
昭和 15 (1940)	41 歳	11 月	三女・黎　生まれる。	
昭和 17 (1942)	43 歳			秋「公定価格」
昭和 19 (1944)	45 歳			冬「麦と松のツリーと」
昭和 20 (1945)	46 歳	3 月	会津若松連隊に入隊中の長男・望に面会に行く。	春「鉛の旅」 秋「いもどろぼう」
昭和 21 (1946)	47 歳		この頃から、農地解放運動に東奔西走する夫・混沌の分まで引き受け農事に励む。	
昭和 30 (1955)	56 歳			秋「水石山」
昭和 45 (1970)	71 歳	4/10	夫・混沌、死去。享年 76。	
		8 月	「歴程」通巻 143 号　三野混沌追悼号に「さいご」と題した一文と「故三野混沌略歴」を寄せる。	
			「いわき民報」へ「歴程」三野混沌追悼号を送る。	
		11 月	「いわき民報」で「菊竹山記」の連載を開始。 （11 月 16 日～昭和 47 年 11 月 6 日まで。全 41 回）	
昭和 46 (1971)	72 歳	10 月	歴程社より『暮鳥と混沌』を刊行。限定 300 部。	春「夢」
昭和 47 (1972)	73 歳	4 月	混沌の詩碑「天日燦として焼くが如し出でて働かざる可からず」が建立され、除幕式が行われる。	春「信といえるなら」 冬「凍ばれる」

年代	年齢	月日	出来事	取材作品
昭和 48 (1973)	74 歳	10 月	「洟をたらした神」を「アルプ」第 188 号に発表。	秋「老いて」
		12 月	「いもどろぼう」を「アルプ」第 190 号に発表。	
昭和 49 (1974)	75 歳	2 月	「飛ばされた紙幣」を「アルプ」第 192 号に発表。	春「私は百姓女」
		4 月	「梨花」を「アルプ」第 194 号に発表。	
		11 月	彌生書房より『洟をたらした神』を刊行。	
昭和 50 (1975)	76 歳	4 月	『洟をたらした神』で第 6 回大宅壮一ノンフィクション賞、第 15 回田村俊子賞を受賞。「百姓バッパ」の受賞として話題になる。	
		5 月	菊竹山で、混沌忌とあわせて『洟をたらした神』出版と受賞の祝賀会が行われる。	
			田村俊子賞の賞金を社会福祉、図書購入費にと、いわき市に寄付。	
		8 月	彌生書房より『暮鳥と混沌』を改版刊行。	
		10 月	文学によるいわき市への貢献により教育文化功労者として市政功労者表彰を受ける。	
			大宅壮一ノンフィクション賞の副賞である世界一周周遊券で約 2 週間、スイス、イタリア、フランス等を旅行。	
		11 月	いわき市の植田公民館で行われた「吉野せいさんを囲む会」に出席。	
昭和 51 (1976)	77 歳	1 月	白内障手術のため、いわき市立総合磐城共立病院(現・いわき市医療センター)に入院。 退院後も体調悪く、寝込む日が多くなる。	
		7 月	『洟をたらした神』を原作とした「天日燦として」が劇団手織座によりいわき市平市民会館で初演される。	
		11 月	いわき市立総合磐城共立病院に入院。	
昭和 52 (1977)	78 歳	4 月	彌生書房より『道』を刊行。	
		11/4	午後 4 時 45 分　子宮がんによる尿毒症のため死去。 享年 78。	
		11/26	せいの誕生の地　小名浜の磐城市民会館(現・小名浜市民会館)で「洟をたらした神」が劇団手織座により上演される。 追善公演となったこの公演の益金は主催者よりいわき市へ贈られ、「吉野せい賞」制定のきっかけとなった。	
		12 月	「6 号線」第 6 号が「吉野せい追悼号」として刊行される。	
昭和 53 (1978)	没後 1	4 月	いわき市が「吉野せい賞」を制定。	
		5 月	昭和 6 年の日記が「梨花鎮魂」と題して「あるとき」に 4 回にわたって掲載される。	
昭和 59 (1984)	没後 7	4 月	文藝春秋より『洟をたらした神』が文庫版として刊行される。	

年代	年齢	月日	出来事	取材作品
平成 6 (1994)	没後 17	8 月	彌生書房より『吉野せい作品集』が刊行される。	
平成 11 (1999)	没後 22	10 月～ 11 月	企画展「生誕百年記念―私は百姓女―　吉野せい展」が いわき市立草野心平記念文学館で開催される。	
平成 24 (2012)	没後 35	11 月	『洟をたらした神』が文庫版として中央公論新社より刊行 される。	
平成 29 (2017)	没後 40	10 月～ 12 月	企画展「没後 40 年記念　吉野せい展」がいわき市立草野 心平記念文学館で開催される。	

※『吉野せい　生誕百年記念-私は百姓女-』(草野心平記念文学館　1999)等を参照

◆◆◆関連資料◆◆◆

『暮鳥と混沌』	吉野せい	歴程社	1971	K/911.5/ヤ
『洟をたらした神』	吉野せい	彌生書房	1974	AL/914.6/ヨ
『洟をたらした神』（普及版）	吉野せい	彌生書房	1975	K/914.6/ヨシ
『暮鳥と混沌』	吉野せい	彌生書房	1975	K/911.5/ヨシ
『民衆史としての東北』	真壁仁ほか	日本放送出版協会	1976	DK/210.1/2/マ
『道』	吉野せい	彌生書房	1977	K/914.6/ヨシ
『吉野せい作品集』	吉野せい	彌生書房	1994	K/918/ヨシ
『洟をたらした神』（文庫版）	吉野せい	中央公論新社	2012	AL/914.6/ヨシ
「歴程」1970 年 8 月号 №143 三野混沌追悼号		歴程社	1970	K/911.5/レキ/
「文藝春秋」5 月特別号 大宅壮一賞発表		文藝春秋	1975	
「6 号線」創刊号		尼子会	1975	K/910.5/ロク/1
「6 号線」第 2 号		尼子会	1975	K/910.5/ロク/2
「6 号線」第 6 号		尼子会	1977	K/910.5/ロク/6
「あるとき」創刊号		彌生書房	1978	K/910.5/アル/1
「あるとき」第 2 号		彌生書房	1978	K/910.5/アル/2
「あるとき」第 3 号		彌生書房	1978	K/910.5/アル/3
「あるとき」第 4 号		彌生書房	1978	K/910.5/アル/4
「あるとき」第 5 号		彌生書房	1978	K/910.5/アル/5
「あるとき」第 7 号		彌生書房	1978	K/910.5/アル/7
『吉野せい』	いわき市立草野心平記念文学館		1999	K/910.2/ヨシ
『吉野せい展』	いわき市立草野心平記念文学館		2017	K/910.2/ヨシ
「いわき民報」				

地域資料パスファインダー「『吉野せい・吉野せい賞』に関する資料の探し方」

※「いわき民報」の一部とパスファインダーは図書館ホームページでも公開しています。

※協力、「いわき市内の吉野せいゆかりの地」・写真提供：いわき市立草野心平記念文学館

令和 6（2024）年 7 月 19 日　発行

■編集・発行　　いわき市立いわき総合図書館

令和 6 年度　前期企画展「吉野せい入門」

■会期　　令和 6（2024）年 7 月 2 日（火）-10 月 20 日（日）

■会場　　いわき総合図書館 5 階　企画展示コーナー